

シェルター 自立支援15年

大阪・釜ヶ崎 路上生活者向け施設リニューアル

昼間の居場所づくりも

路上生活者が一夜をしのぐ大阪・釜ヶ崎の臨時夜間緊急避難所「シェルター」。3年限定で大阪市が2000年に設けた全国初の公的施設だが、利用者が途絶えずに存続し、1月に新しい建物にリニューアルされた。労働者の高齢化などで「定宿」になりつつある今、自立に向けて気軽に相談できる昼間の居場所づくりも進めている。

午後5時半、あいりん総合センターの順番を待っていた。合センターの近く、数十人、80代の男性は「20年ほどが整理券を持ち、白い息を吐きながらシェルターに入

見える。「親の介護で奮えを使い果たし、5年ほど前から路上で暮らしている」。普段は外で夜を明かすが、



野宿者が襲撃される話も聞く。「怖い」と何度も口に

青森県出身の男性(70)は9年ほど毎日、シェルターに通っているという。釜ヶ崎に来て約30年。「60歳前

まで日雇い仕事に行けた。今は使ってくれない」。市が旧シェルターを開いたのは、不況で野宿者が急

増した頃。野宿者への投石なども頻発していた。プレハブ2階建て3棟で、大部屋に2段ベッドが並び、洗面所や温水シャワーがあり、600人が寝泊まりできた。運営はNPO「釜ヶ崎支援機構」が担った。

市は当初、「緊急対策」として3年間の使用期限を設けていた。だが、期限は更新され続けた。15年たつて雨漏りやすきま風に悩まされるようになり、建て替えることになった。

代以上には、長期間シェルターに寝泊まりしている人も多い。「体が動くうちは行政の世話になりたくない」「行政からの照会などで親類に迷惑をかけたくない」などと、生活保護を受けない人もいるからだ。

4月には、「居場所棟」が完成する。昼間にくつろげる場所とともに、生活相談や就労支援の窓口を設ける。支援機構の山田実理事長(66)は「相談しやすい環境をつくり、自立を支援する場所にしたい」と話す。



新たに完成したシェルター。49人が泊まることができる

あいりん総合センターでシェルターの整理券をもらう人たち

シェルターの管理をする山中秀俊さん。ベッド用の畳も新しくなった。いすれも大阪市西成区

「人として安らぐ場を」

「野宿生活をしていても人間として、安らぎの場がない」と。釜ヶ崎支援機構の山中秀俊さん(59)は言う。2年ほど前から、シェルターで働く24人のスタッフを管理人としてまとめている。神奈川県出身。自らも日雇い労働者だった。大学生の時に成田空港の三塚闘争などに関わり、1982年、友人に連れられ釜ヶ崎へ。労働組合で活動しながら、建築仕事などで生計をたてた。父が体調を崩したため一時は釜ヶ崎を離れたが、2004年に戻った。

その年、同機構のメンバーに。数年後には専属職員になり、労働相談や就業支援に携わってきた。

建物はずいぶん変わったが、部屋は毎日約300人が過ごすシェルターは、ほかの利用者が気になり、決して快適とは言えない。特に若者は利用を避けがちだ。今、ここを必要とするのは、日雇い時代に自分の世話をしてくれた「先輩」の世代だ。土木現場での初仕事に手を取った時に代わりやってくれた人。同じ給料なのに率先して危険な場所の仕事を手伝ってくれた人。そんな人たちの顔が思い浮かぶ。杖をつき、階段をのぼれない人も増えてきた。「半分くらいの人ばかりが終のすみかになっちゃった」。ここはあくまで避難所で、生活の場所ではない。それでも、「家」のように感じてほしいと思っている。(釜井哲也)

